

2022年4月3日 受難節第5主日礼拝

メッセージ「道との遭遇」

向島伝道所・岡嶋千宙伝道師

聖書 イザヤ書 43章 16-21節

桜が咲くこの季節。3月末から4月の初め。日本では、年度の変わり目の時期です。終わりとはじまりの間。これまでの歩みに一区切りをつけて、新しい歩みへ向けて整えていくとき。「これまで」と「これから」の中間地点。たとえば、卒業と入学。新しい年度から始まる新しい環境での生活を待ち望み、ワクワクしている。昨年春、小学校を卒業したわたくしの子どもの姿を今でもはっきりと思い返すことができます。6年間をやり終えたという達成感とともに、新しく歩むことになる中学生としての生活に、一抹の不安を覚えながら、それでもやっぱり楽しみを期待している。そういうわたし自身も、小学から中学へ、中学から高校へ、高校から大学へ、そして大学から社会人へと、新しい歩みの道を踏み出すたびに、不安と期待が混じりあったような感覚を抱いていたことを思い出します。淡く咲き誇るピンク色の桜は、この時期にわたしたちが抱くそんな思いを象徴しているのかもしれませんが。

ただ、誰もが期待やワクワク感を抱いているとは限りません。これまでの歩みがあまりにも過酷で苦しみに満ちている場合、今この時を生きることには精一杯で、これからのことなんて思い描けない、ということもあるでしょう。先のことには思いを向けることができなくて、一秒後の自分の姿すら描けなくて、描きたくなくて、歩みを止めたくなる。失望、絶望、無気力の中で、このときを過ごさざるを得ない。新型コロナウイルス、環境汚染による気候変動、世界各地で続けられている紛争と戦争。現代に生きるわたしたちは、もしかしたら、誰もが、今このときを、期待やワクワクではなく、失望や絶望を隣にしながら生きているのかもしれませんが。

本日の御言葉、イザヤ書 43章 16-21節。今から2500年以上も前に「これまで」と「これから」の間を生きていたイスラエルの人々に対して、神が語った言葉が記されています。その言葉を見ていく前に、イザヤ書について簡単に全体像を確認しておきます。イザヤ書の冒頭1章1節には、「アモツの子イザヤが見た幻」とあり、同じ言葉が2章1節にも記されています。このことから、イザヤという人物がこの書の執筆者であると思われるのですが、この書物を記した、もしくは今の形でわたしたちに伝えられることになった過程に関与した人物は一人ではありません。複数の人たちが、しかも長い時間を経てまとめていった書物なのです。書かれている内容は、紀元前8~6世紀のこと。イザヤ書全体で、3つの時代区分があると考えられていて、1~39章までが紀元前8~7世紀、40~55章までが紀元前6世紀前半、56~66章までが紀元前6世紀後半の出来事を扱っている、とされています。今日の箇所は、その3つの時代区分のうちの二番目、紀元前6世紀前半の出来事です。それより約400年前に、イスラエル史上最も偉大な王とされるダビデによって、統一イスラエル王国が築き上げられました。しかし、ダビデの孫の

時代に王国は南北二つに分裂し、北の王国は紀元前 722 年にアッシリアによって滅ぼされました。他方の南の王国は、その後も存続したのですが、ついに、紀元前 587 年、現在のイラクがあるメソポタミア地域で新バビロニア帝国が台頭し、その侵攻によって滅ぼされます。政治・経済・宗教の中心地であった王国の首都エルサレムが徹底的に破壊され、人々の信仰の拠り所とされていたエルサレム神殿もその土台から崩されました。その地に住んでいた人々は、一部の貧しい人たちを除いて、侵攻者である新バビロニア帝国の人々に連行され、異国の地に強制移住させられたのでした。すべてを失ったイスラエルの人々。なにもない。王国が滅ぼされ、独立国家としての主権を失いました。強制移住により、住み慣れた土地、帰るべき故郷を失いました。神殿が破壊されて、信仰の拠り所を失いました。なにもない。本日の 19 節、20 節にある「荒れ野」「荒れ地」という言葉は、すべてが崩れ去って、なにも残っていない当時の状況、イスラエルの人々の喪失感を表していると言えるでしょう。

その人々に対して、神が語った言葉。中心となるメッセージは、18 節です。「先にあったことを思い起こすな。昔のことを考えるな。」わたしたちも、誰かが、失意を覚えて身動きできなくなっているとき、「くよくよしないで。過去のことはもう忘れて、前を見よう」と言葉をかけることがあります。ですが、ここでの文脈を見てみると、違和感があります。というのも、18 節の前の部分とうまく繋がらないのです。16-17 節「(神は)海の中に道を、荒れ狂う水の中に通り道を作られ、戦車と馬、大軍と兵を連れ出し、彼らを皆倒して起き上がらせず、灯心の火を消すように消滅させた」。文章の最後が「させた」とあるので、ここでは、過去のことが言われているのだろうと推測されます。そして、実際に、これは、過去の出来事に言及していると考えられています。本日の御言葉が記される 1000 年以上も前、イスラエルの人々が、奴隷として過酷な生活を強いられていたエジプトの地を抜け出していったときの出来事、出エジプトのことが描写されているのです。そして、その出エジプトの出来事は、イスラエルの人々にとって「思い起こしてはならない」ものではなく、むしろ、頻繁に思い起こすべきものなのです(たとえば詩編 78 編)。この箇所が出エジプトのことが語られている、ということは、やはり過去に目を向けよ、ということなのでしょう。16-17 節では、過去を振り返れ。そのすぐあとの 18 節では、振り返るな。いったいどっちなのだ。神の言葉が矛盾しているように思えます。

ここでの神の意図を探るためのヒントのひとつが、16-17 節で用いられている動詞にあります。日本語では、すべて過去の動作を表すように訳されていますが、ヘブライ語の原文をたどると、そうではありません。16 節の「道を作る」「連れ出す」は現在分詞、17 節の「倒す」「起き上がらす」は未完了、そして同じく 17 節の「消す」「消滅する」は完了の形で用いられています。つまり、現在も動作が行われている、もしくは動作そのものは終わっていたとしても、その動作の影響が今も続いているというニュアンスが込められているのです。過去の出来事ではあるけれど、閉じられていなくて、現在にも開かれている過去。さらにもうひとつのヒント

が「川」という言葉です。「川」もしくは「水」という言葉は、イザヤ書全体を通して頻繁に用いられるのですが、今日の箇所を含めた紀元前 6 世紀前半の出来事を扱う 40-55 章における用いられ方に着目すると、ある特徴に気づかされます。というのは、同じ川であっても、真逆の意味が込められているのです。本日の箇所 19-20 節、41 章 18 節、および 48 章 18 節では、神の救いによってもたらされる新しい命の流れ、あるいはその流れの源という意味があります。これに対して 42 章 15 節、44 章 27 節、50 章 2 節では、神の救いととも失われていくものという意味合いが込められているのです。たとえば、44 章 27 節では、「わたし（神）はあなたのもろもろの川を涸らす」と言われています。44 章 3 節にあるように、「水」は神の祝福と結びつけられて考えられています。川には水が流れており、ということは、川は人の乾きを潤わすもの、つまり、神の祝福をもたらすもののはずです。それなのに、その川が涸らされる、というのです。干上がった川、荒れ野にされた川（50 章 2 節）は、人々を潤わすことができない。水の流れが滞り、流れなくなり、固まってしまった状態。動きが失われ、命を失い、したがって、潤いを与えることができなくなった川。枯れ果ててしまった川。これは、神の存在、神の姿、神の救いの業を、人々が、自分たちの理解できる尺度のなかに、人間の理解の範疇に納めようとした結末、と考えることができないでしょうか。自分たちの経験や、たとえば出エジプトの出来事のように、先人たちから伝え聞いたものをベースにして、神の姿、神の救いのイメージを描いていく。それ自体は間違いではありません。むしろそれが、人々の間での連帯をうみ、将来への救いの希望をもたらす大きな原動力となっていることは確かです。ですが、そのイメージが固定化されていった場合、神の救いの流れは滞り、人々に届かなくなるのです。

本日の箇所、神が「過去を振り返るな」と語ったのは、神の救いの流れを止めずに、固定化させずに、常に新しい流れを、新しい救いの業を、思い描き、期待し、神に求め、そして信じよ、ということなのではないでしょうか。それは、神の姿を人間の思いの枠にはめて考えたり、あるいは神の救いの業を人間の尺度で解釈したりするな、ということでもあります。40-55 章では、繰り返して、万物の創造主としての神の姿が描かれています。そして、終わりの部分、55 章 8-9 節では、その神の「思いは、あなたがたの思いとは異なり」、神の道は「あなたがたの道とは異なる（略）。天が地よりも高いように、神の道はあなたがたの道より高く、神の思いはあなたがたの思いより高い」と語られています。人の思い、人の尺度、人の枠から自由である神。その神を自分たちの解釈の範疇に縛り付けているが故に、救いを信じられなくなった人々。そんな人々に対して、神は自分を解放するように、常に新しい流れとして注がれる神の救いを求め、受け入れていくようにと語ったのです。

苦しみのイエスを覚える受難節に与えられた御言葉として、本日の箇所に触れるとき、とても重く、とても重要な問いを投げ掛けられているように感じます。イエスの姿を固定化しているのではないか。教会でこれまでに何度も繰り返し聞いてきた、あるいは触れてきたイエスのイメージに、とりつかれてはいないでしょうか。イエ

スの歩みを、自分たちの価値基準で判断しようとしていないでしょうか。イエスの姿を自分たちの尺度に押し込めてはいないでしょうか。あれほどまでに自由に、そして大胆に、当時の社会にあった「当然」に立ち向かっていったイエスを、わたしたちにとっての「当然」という監獄に閉じ込めてはいないでしょうか。イエスは、当時の多くの人たちが当たり前とする事柄を大胆に打ち崩していった方です。ガチガチに凝り固まった宗教理念、教理・教則、あるいは信仰実践のあり方を痛烈に批判し方です。固まりすぎて、身動きがとれなくなって、当時の社会の今を生きる人々に、命の流れをもたらすことのできなくなった宗教の、信仰のあり方に「否」と言った方です。そして、そんな宗教に代わる新たな命の流れとして、自分自身を人々の前にさらけ出した人でした。ヨハネ福音書 4 章に描かれる、サマリアの女性と対話をしたときのイエスの姿が思い起こされます。決して干上がることなく、永遠に流れ続ける命の水である、と語ったイエス。そのイエスを、「自分の知っている」イエスの姿にとどめておこうとするのなら、わたしたちは、当のイエスによって批判された人々のように、大きな誤りを犯してしまうことになるでしょう。イエスの苦しみを覚える、その苦しみに思いを馳せる、というのは、わたしたちの思いによってがんじがらめにされ、動きがなくなり、命の流れではなくなってしまっているイエスを、解き放つことなのではないでしょうか。わたしたちの知っているイエスではなくて、わたしたちの知らないイエスに出会い続けていくこと。まだ見ぬイエスの一面に触れていくこと。「わたしは道である」(ヨハネ福音書 14 章 6 節)と語ったイエスの「未知」の部分にこそ目を向けていく必要があるでしょう。

新型コロナウイルスによるパンデミック。ウクライナを初め、アフガニスタン、イスラエル・パレスチナ、ソマリア、ミャンマー、コンゴなど、各地で繰り広げられている戦争や紛争。世界規模での抜本的な行動変容がなされなければ地球自体が滅びると言われている気候変動による自然災害の数々。人類の歴史のなかで、「当然」あるいは「常識」とされてきたことがらが、まったく通用しない事態に次々と直面している現在。ここで、「もうだめだ、救いはない」と諦めるのか。それとも、これまでの「こうだったから」にとらわれずに、視点を変えて、立ち位置を変えて、異なるものであっても柔軟に取り入れて、失望を希望に変えていくための道を描き、期待し、歩いていくのか。わたし個人的には、後者の選択をしたい。あきらめずに、今、隣にいる人たちと、また、これから出会い、隣にいるようになる人たちと、共に生きることができると描き、築き上げていきたい。だから、まず何よりも、わたしが、わたしの内に閉じ込めているイエスを、神を、救いの業を解放することが求められているのだと思うのです。2 週間後のイースターの日。そこで出会うイエスはどんな姿をしているのでしょうか。皆さまと共に、命の力に満ち溢れ、その力を水の流れとして溢れ出させているイエスに出会い、その姿に、これまでに覚えたことのなかった驚きを抱き、そして喜び、祝福できることを願います。